

洋学思想の文献学的省察

——『蘭学捷法』——

藤 原 暹

拙著『鶴峯戊申の基礎的研究』は昭和47年度文部省科学研究費刊行助成を受けて出版したものである。¹⁾出版時に出版上の都合で割愛した部分やその後に判明した事項があり、この際それを補筆しておきたいと思う。この稿は鶴峯の『蘭学捷法 一名蘭学通補』を中心に述べる。

1. 国立国会図書館蔵『蘭学捷法』について

鶴峯戊申のオランダ語学についてはその後、杉本つとむ博士が大著『江戸時代における蘭語学の成立とその展開II, IV』²⁾で詳しく論じられたが、この資料の紹介はなく、いくつもの点で新しい事実もみられるので資料紹介もかねて述べてみる。

杉本博士は主として、鶴峯の『蘭音仮字格』『蘭字通』『洋文翻訳便覧』の三著を中心に述べられている。

この中で、『蘭音仮字格』は「文政五年三月 鶴峯戊申書」とあり巻末に「此一巻文政九年三月 再校」とある若林正治氏所蔵本を使用して初期の鶴峯の蘭語研究の状況を分析している。³⁾

ところで此書は副題に「蘭音捷徑」とあり、何等かの形でここにとりあげる『蘭学捷法』と関係がみられるものと推察される。

この書は「上」と「下」があり冒頭に「蘭学捷法 上 一名蘭字通補」とあり、くまえがき」と本文六丁の叙述がある。「蘭字通補」とはすでに成っていた戊申の『蘭字通』（一帖文政十三年 天保元年刊）の「増補」を意味しよう。杉本博士は『蘭字通』に関して次のように述べておられる。（これも若林正治氏所蔵本を使用）

全体はく1. まえがきのなもの 2. 本文蘭字 3. 新書略目 4. 註解の部 5. 識語」となっている。まず、1. のくまえがきのもの」はつぎのように記述されている。本書成立の事情を語っているのである。

1) 東京、桜楓社、昭和48。

2) 東京、早稲田大学出版部〔II〕昭和52。〔IV〕昭和56。

3) 同上〔II〕「鶴峯戊申とその蘭語研究」1093頁～。

庚寅之冬鶴峯臯屋先生來遊吾藩為諸子講語学天学韻学算学等其法皆簡易捷徑使学者一時會得其余与永岸井三子共受業數日既尽諸科及蘭字韻音法唯於橫行之字苦謄写焉因請先生刻其所筆受以便後進之士亦足觀妙趣之一班矣
若山今恭識

〈庚寅〉はおそらく天保元年（1830）を指すかと思う。〈新書略目〉の中に、文政8年刊の『徴古究理説』が刊行されているので、それ以降であることは確かで、上の推定はほぼ正しいかと思う。〈吾藩〉とあるから鶴峯が、若山今恭の属する藩に來遊したわけであろうが、具体的にどこの藩と明示できない。鶴峯は行動力もあり、かなりあちこちで、蘭学なども講説しているようである。そして最後の5. 〈識語〉は〈門人 円井方 識〉とあるから、これは門人であってしかも識語によると、この部分だけ後から付加したものであることが判明する。⁴⁾

『蘭学捷法 上』の〈まえ書き〉には、『蘭字通』の「若山今恭識」という文の全文筆記（筆記者は巻末に「于時天保十二辛丑仲夏 鶴峯季尼先生門人 河野通尚写」とあるので、河野通尚と判明する）がある。しかも次のように鶴峯の言が詳述されている。

早引蘭字通ハ、余和歌山游行ノトキ。諸子ノ為ニ示ス所。紀伊殿御奥医今井隨菴名恭于時十七歳筆録シテ上木ヲ命ズ。隨菴ガ父隨奔翁ハ本居翁ヲスヽメシ人ナリト云リ。余隨菴ニ別ルヽニ及ヒ、本居翁ノ小色紙ヲ余ニ送ラル。江戸住居以来金座出役広瀬九十郎。コトニ交深キヲ以テ。為ニソノ色紙ヲ贈ル。今表⁷⁷獲シテカノ家ニアリ。ココニ記シテ永ク隨菴子ノ志ヲ謝セントス。

これによると、鶴峯戊申が紀州和歌山藩で講業した折に藩医今井隨菴（名、恭）がその講業内容を筆録し上木したものという。さらに戊申は今井恭の父翁とも親交が深く本居翁（大平）から翁がもらった色紙をもらっている。なお今井恭の文中「余与永岸井三氏共受業」とあるが「永岸井」とは「文政八年冬紀州若山本居宅講尺并他席」の記録及び「文政十三年時分 天保二年かける」という講業記録⁵⁾に徴すると「永井円左衛門 西宇治」, 「貴志武蔵 久野家門前」「井原仁左衛門」らしい。なお「識語」を書いた円井方は同じ記録に「円井啓二 方 新通」とあり戊申の門人の一人であった事は確かである。勿論、今井隨菴は「今井隨庵 漆中之町出口 田中武同居」とある。

つまり、『蘭字通』は天保庚寅、戊申が若山講業の内容を受講生達がまとめ、それを徴古究理堂蔵として出版したものである。それを更に増補しようとしたものが『蘭学捷法』であった。

では、如何に増補しているであろうか。

『蘭学捷法 上』は1. 「空別泄」 2. ローマ字の五十音図 3. A E I O U Y 七字韻字 4. 発音 5. 数量字 6. 記号字 7. 点例 8. 訓読法と単語 9. 翻訳法と

4) 同上 1101頁。

5) 前掲拙著 207頁。

いう記述である。『蘭字通』が「アベセ」と「四字体」と「点例」を一枚刷りの表にまとめたものであるに対し、一応蘭学の語学的知識を全般に亘って示しているのである。ところで、「点例」の部分に「悉クハ蘭学階梯ニ見エタリ」とあり、この書が大槻玄沢の『蘭学階梯』を参考に行っている事が分る。そこで玄沢の『蘭学階梯』と写真版で対比してみると例えば次の如くである。

以上、共三十二頁。

<i>Herst.</i> 秋	<i>Rood.</i> 赤	<i>West.</i> 西	<i>Hemel</i> 天
<i>Winter.</i> 冬	<i>Geel</i> 黄	<i>Zuid.</i> 南	<i>Stard.</i> 地
<i>Mensch.</i> 人	<i>Wit</i> 白	<i>Noord</i> 北	<i>Zon</i> 日
<i>Man.</i> 男	<i>Zwart</i> 黒	<i>Water.</i> 水	<i>Maan.</i> 月
<i>Vrouw.</i> 女	<i>Kou.</i> 寒	<i>Vuur.</i> 火	<i>Sterre.</i> 星
<i>Vader.</i> 父	<i>Warm.</i> 温	<i>Boom.</i> 木	<i>Wolk</i> 雲
<i>Moeder.</i> 母	<i>Lente.</i> 春	<i>Goud</i> 金	<i>Lugt</i> 氣
<i>Zoon.</i> 子	<i>Zomer.</i> 夏	<i>Blaauw.</i> 青	<i>Oost.</i> 東

玄沢の上に当る部分が、戊申では「以上訓読法」となっている。

^{ソラ}Lon. ^{マア}Maan. ^{ステル}Stelle. ^{ワルク}Wock. ^{ルフト}Luft. ^{オスト}Ost.

ZON. maan. Stelle. Wok. Luft. Ost.
 日 月 星 雲 氣 東

^{ヴェスト}West. ^{ズイ}Zuid. ^{ノード}Noord. ^{ワテ}Water. ^{ヴュー}Vuur. ^{ゴウド}Goed.

West. Zuid. Noord. Water. Vuur. Goed.
 西 南 北 水 火 金

^{ブラウ}Blaauw. ^{ロოდ}Rood. ^{ゼール}Geel. ^{ウィ}Wit. ^{ズワート}Zwart. ^{コウト}Kout.

blaauw. Rood. Geel. Wit. Zwart. Kout.
 青 赤 黄 白 黒 寒

^{ワーム}Warm. ^{レンテ}Lente. ^{ゾメ}Zomer. ^{ヘーフト}Herfst. ^{ウィン}Winter.

Warm. Lente. Zomer. Herfst. Winter.
 温 春 夏 秋 冬

^{メン}Menſch. ^{マン}man. ^{フロウ} Vrouw

menſm. man. vrouw.
 人 男 女

玄沢で三十二言あるものから、順序が變つており、Hemel 天 Aard 地 Moeder 母
 Soon 子 Vader 父 Boom 木 の六言が欠落している。いま一つ例を上げる。

先則可敬少則可習
 老可人敬少可人習
 則可人敬少可人習
 則可人敬少可人習

他終夜讀書微且
 終夜讀書微且
 終夜讀書微且
 終夜讀書微且

六
 則可人敬少則可習
 則可人敬少則可習
 則可人敬少則可習
 則可人敬少則可習

白鳥不易流規性亦復霜
 則可人敬少則可習

須
 則可人敬少則可習
 則可人敬少則可習
 則可人敬少則可習

則可人敬少則可習
 則可人敬少則可習
 則可人敬少則可習
 則可人敬少則可習

玄沢が十例提示している格言中、四例を引用しているのである。このように対比してみると、ほとんどの記事が『蘭訳階梯』からの引用の感がするが、戊申の独創性はむしろ次のような記述にあった。

西洋人兒童ニ空別泄ヲ習ハシムルニ重ネ読ニシテ習ハスルヨシ。重読トハアーベー ベーサー セーデー デー エー ナドヨウニヨムナリ、猶此方ノ兒童イロハヲ習フニ イー ロー ハー ニート読々書習フガ如クナルベシ……中略左ノ如クヨミオホユル寸ハ蘭書ヲヨムナリ此方ノ假字本ヲ読ガ如ク了然タルヲ得ベシ。翻訳ニハハルマ訳鍵等ヲ用フベシ。ナホ蘭学訳法ノ統語学新書ニ祥也 参考スベシ。

こうした教育技術の工夫に本領があったのである。(後述関係記事参照)

ところで、一方『蘭音捷徑』との関係である。杉本氏は『蘭音捷徑』を『蘭訳階梯』の「改編」であり、「引き写しにすぎない」とされる。⁶⁾この点『蘭音捷徑』と『蘭学捷法 上』とはほとんど同じであると言っても過言ではあるまい。

では『蘭音捷徑』以後の展開はみられないのであろうか。

『蘭学捷法 下』は大きく四部分によって成っている。

- 西洋語法用言缺助辞完助辞例
 - 直説法缺助辞
 - 直説法完助辞
- 逆説法
- 分読法
- 直読法

である。このうち例えば冒頭は次の如くなっている。

	直説法缺助辞	動他用言ノ助辞ヲ缺助辞トス。動他ハスナハチ役格ナリ。
現在単	ik hib een book 吾持ッ 一書ヲ	吾ハ持ツ一書ヲノ意ニ聞ユレドモ、訳ニハ吾ハ一書ヲ持ツト逆読ニスベシ。
未過単	ik had een book 吾持 一書	吾一書ヲ持テバ持テド持テトモ同ジ。スヘテ下ニ体言有ルハ逆ニ読ム
全過単	ik heb een book gehad. 吾タリ 一書ヲ持チ	吾ハ一書ヲ持チタリ、持チキ、持チケリ同ジ。スヘテ下に用言アルハワケヨミニスヘシ
過過単	ik had een book gehad 吾タリ 一書ヲ持チ	吾ハ一書ヲ持チタリケリト訳ス持チタリニテ既ニ全過ナルヲ、又ケリ添フ故ニ過々ナリ。
未来単	ik zal een book hebben 吾将 一書ヲ持タ	吾ハ一書ヲ持タント訳ス。是等ノハ処ニヨリテハモト訳スベシ。

gehad ヲテールワールドト云フ。現在ノ hib 此テールワールドノ上ニアルトキハ全過トナリ。未過ノ had 此テールワールドノ上ニアルトキハ過々トナル例也。hib ハ heb ト同ジ。

6) 前掲杉本著 1099頁。

つまり、助言、他動詞を使用した単数の主格の場合における「諸時（制）」の用例文である。

こうした用例文は、例えば中野柳圃（志筑忠雄）の『纂属文錦囊』に次のようにある。

○ deel woord 不断詞

現在 een geleerd aan zijnde 学者にして

過去 een geleerd man geweest zijnde 学者にて有し

未来 zúllende een geleerd man zijn 学者にてあらん

文ノ勢ニヨリテハ zijnde ヲ首ニ云トキモアリ但此等ノ訳法ニハ変化アル 前ニイヘルカ如シ
ik hebben boek [ik heb een boek] 事跡 我一書をもてり

ik had een boek ○我一書をもてり
○我一書をもちき

ik hebben boek gehad 我曾て一書をもてり

ik had een boek 事跡 我曾て一書をもてり

○ onbepaalde wijze 不限

現在 een boek te hebben 一書をもてり

過去 een boek gehad te hebben 一書をもちき

未来 een boek te zullen hebben 一書をもたん

右ノもてりハ有ノ字ノ意ナリ我に一書ありナト訳シテモヨシ

○ deel woord 不断詞

現在 hebben de een [eens] boek 一書をもちて

過去 een boek gehd [gehad] hebben 曾て一書をもちて

未来 zullen de een boek hebben 一書をもたん

書をもちたる人ニ書をもたん人ナトトモツク也訳法一ナラス前ニイヘル如シ凡ソ hebben ハ
deel woorden ト zelfstandig トニカハリ worden ハ deel woord, zelfstandig, bijword
[bijvoegelijk] ト皆カレリ zijn ハ zelfstandig bijvoegende トノニツニカナルナリ又 zullen
ハ zouden ニノミカナル也但シ aanvoegenderlyte 也

死語 | 未来 ik zal een geleerd man zijn 我ハ学者ならん

未来 ik zal een boek hebben 我一書をもたん [我ハ一学者なるへし]

棒線は藤原の附したものであり、明らかに柳圃の前掲書の影響と考えられる。しかし柳圃の場合、ik leer. ik heb geleerd. ik had geleerd. ik zal leren 等の用例文を用いて、deel woord（分詞、柳圃は「不断詞」とする）の説明を詳しくしている。戊申の場合には「テールワールド」とし、それを hib, had の位置関係において簡略に説明しているにすぎない。

つぎに、自動詞を使用した主格が単数の場合の「諸時（制）」の説明をしている。

直接法完助辞

現在単 ik ben daar
吾居ル_ル 彼処_ニ

我ハ居ル彼処ニノ意ニテ聞ユルトモ訳ニハ吾ハ
彼処ニ居ルト逆読ニスヘシ。

未過単 ik was daar
吾居_{レバ} 彼処_ニ

吾彼処ニ居レバト訳スベシ。居レド居レドモ同
ジ。

全過単	ik ben daar geweest 吾タリ [○] 彼処ニ居リ [○]	吾ハ彼処ニ居タリト訳スヘシ。分読ノ用例欠助辞ニ同シ。
過過単	ik was daar geweest 吾タリ [○] 彼処ニ居リ [○]	吾ハ彼処ニ居タリケリ
未来単	ik zal daar zijn 吾将 [○] 彼処ニ居ラ [○]	吾ハ彼処ニ居ラントス。

geweest ヲテールヲールドト云現在ノ ben 此テールヲールトノ上ニアルトキハ全過トナリ。未過ノ was 此テールヲールトノ上ニアルトキハ過々ナリ例也。

とある。

この用例文は柳圃のものには見当らないようである。柳圃の影響を受けたと言われる藤林普山の『和蘭語法解』⁷⁾では、いわゆる三世と助言について、「活言三世」として「現在、過去并未成過去、全成過去、過去過去」と表記する。そして未成過去を「以下未過ト云者ナリ」と略記している。戊申が「未過、全過、過過」としたのは藤林のそれを引用したものと考えられる。また、戊申が「缺助辞」「完助辞」とするものも同じく藤林のそれに依っているように考えられる。藤林は「完助言」の説明文で例文をあげず、ただ直説法の単数では ik ben をのみあげていて戊申の ik ben daar は見当らない。しかし中巻の巻末で直説法現在以下の例示で、er is, er was, er is geweest, er was geweest, er zal zijn 等がある。また、これら戊申の記述の後に掲げられた「逆読法 bit huis is grootste van alle de an deren.」は藤林の上巻「最階 bit huis is het grootste van alle de an deren」の引用であり、また戊申の「Nippon, dat is de wortel der zonne」は同じく下巻の「明接言 Nippon, dat is de wortel der zonne」からの引用である。してみると、戊申の記述は『和蘭語法解』を基にされたものと考えられる。

さて、戊申は「直接法欠助辞ノ完助辞」の紹介のあと次のように述べている。

西洋書ヲ訳スルニハ、右ノ缺助辞完助辞ノ二法ヲ準則トシテ、一節或ハ半節ノ間ニテ其下ナル語是体言ナルカ、是用言ナルカヲ査シ得テ、モシ体言ナラバ逆読ニスベシ。モシ用言ナラバ分読ニスベシ。又今一種直ニシテ可ナル者アリ。其時ハ下ノ字体言ノ時モアリ、用言ノ時モアルナリ。但シ性言及熟字等ヲハ相連ネテ、一言ノ格トシテ読ムベキナリ。先輩ハジメテ西洋書翻訳ノ業ヲ起セントキ、イマダ此法ヲ發明セズ。故に其勞少ナカラザリシナリ。初学其イマダ聞ク所有ラザルヲ以テイブカルコトナカレ。

この文によると、「欠助辞」「完助辞」の紹介をもって蘭語文の読解を試みたことがこの書の特徴であるように見受けられる。しかしすでに述べた如く、戊申の言う「發明」は中野柳圃及び藤林普山にあったのである。(藤林の『和蘭語法解』自体、柳圃の『属文錦囊』の影響が見られるという指摘がある。おそらく柳圃の影響は藤林を経由して戊申に伝わっ

7) 本稿は東北大学所蔵本を使用した。

たと言ってもよい。)

つまり、戊申の『蘭学捷法』はその上巻を主として、玄沢の『蘭訳階梯』からの引用、下巻を藤林普山の『和蘭語法解』からの知識の応用でもって満していると言ってよい。従って、上記文中「先輩ハジメテ西洋書翻訳ノ業ヲ起セシトキ」という先輩とは大槻玄沢を指すものであろう。

いずれにしても、戊申の「発明」は蘭語学自体の世界ではみられないものであったと言える。

2. 戊申蘭語学習の意味

すでに前掲拙著において、戊申関係史料「雑記」を掲載し、「大坂にてひろくまじはりたる友かきの中に仲環こそ益ある友がき也けれ この人は京人にて藤林氏の語法解の校合をしたる人也」⁸⁾とか「戊申語学のはじめは文政中伊丹講業の折かの薬師前僑居の時むつの人小山要人と云人來りて…要人語法の事をかたり出たり。戊申そのころ韻鏡悉談蘭字までには手をいれ置たるがいまだ語法には及ばざりければかれに対ふるやうもなく もし授与せらるるわざあらばわれに其術えさせよといひけるに われいまだ手にいれおほせたるにあらずなごやのよしを先生此事にくわしきよし…天保二年の冬東へ下りけるに名護屋にて吉雄氏にはじめて対面にいたるに…」⁹⁾という指摘をして、戊申の語法が仲環、藤林、吉雄俊蔵に負う所大である事を戊申自身が語っていると述べた。

仲環とは中天遊（天明三～天保六）で大槻玄沢門の蘭学者である。京都育ちであるが、大坂で開業し、のち京町堀千秋橋北詰坂本町（西区）に思々齋塾を開き、後緒方洪庵も入門する。J. ケイルの引力論を翻訳して『引律』を成す。この塾では志筑忠雄（中野柳圃）の『曆象新書』がテキストの一つとして使われていたという。また、彼は文政五年に齋藤方策（明和八～嘉永二、大坂京町堀籠屋町で開業）と共に把爾翁湮^{ベール}湮^{ヘン}『解剖図譜』を公刊した。戊申とは親交があり、彼の講業の席をも設けて呉れた人であった。

さて、東北大学附属図書館に藤林の『和蘭語法解』が二本ある。一本は上、中、下三冊本で、いま一本は下巻のみの一冊本である。共に京都丁字屋定七の出版になるものである。比較してみると、三冊本の上巻のはじめに、

平安普山藤林先生訳述

但馬 堤碌桂樹 参定
讃岐 宮武文明
平安 長友義雅楽 校正

8) 前掲拙著 259頁。

9) 同上 257～258頁。

とあるが、中巻では

但馬	堤礫桂樹	
讚岐	宮武文明	参定
波華	仲環	環中 校正

と校正者として仲環が現われている。このメンバーは下巻も同じで、別本の下巻の方も同じである。前掲の戊申の記事中「仲環こそ益ある友がき也けれ…藤林氏の語法解の校合をなしたる人也」とあるのはこの事実を指す。戊申の講業記録によると、

文化十四年時分ヨリ文政中於大坂所々束脩人…
 文政六年時分
 齋藤方策 大坂籠屋町
 小山田見蔵 江戸堀五丁目
 金沢玄貞
 仲環 大目橋筋籠屋町
 鳩野元達門人等 肥後蔵ヤシキ

とある。戊申の講業に束脩をおさめ参加したのが文政六年頃である。すでに『和蘭語法解』は堤礫桂樹の序文によると文化九年刊の由であるから、仲環や方策の充分知れる内容のものであった。当然戊申が彼等から藤林の蘭語法解を学ぶ事は考えられることであった。

ところで前掲した杉本つとむ博士の大著には仲環の事が「稲村三伯と門人」として二頁ほどある。¹⁰⁾「おそらく、中天遊自身が蘭語知識があまり芳しくなかったという通説や彼がいわゆる蘭語学書を執筆していないが故であろう。」とある。

一方、仲環の蘭語学力をかなりなものと評価する吉田忠氏は

「(天遊) 藤林氏の語法解の校合をしたる人也」という鶴峯戊申の言が信頼できるなら、同じ随鷗門下の藤林普山の『蘭語法解』の校合ができる程蘭語の能力があったと言える。

と記している。¹¹⁾

中天遊が『和蘭語法解』の校合を行った事は間違いではなく、また『和蘭語法解』の内容を了解して印刷上の訂正に当たるだけの理解力を戊申以上に備えていたのである。

ところで、中天遊から学ぶという事はどんな意味があったのであろう。

前述した戊申の稿本によると、彼は文政年間伊丹講業の折、小山要人という人から語法について質問を受けた。その時戊申は蘭字は心得ていたが「語法まで」には及んで居なかったという。そして「語法をかうがえ初たるは文政八年の冬若山に遊べる時より也」¹²⁾という。この「語法」とは後にまとまる『語学新書』に連なる日本語法を意味しようが、その

10) 前掲杉本著〔IV〕754頁～。

11) 「中天遊の蘭学」東北大学日本文化研究所報告12集, 1972。37～38頁。

12) 前掲拙著 258頁。杉本著では天保2年尾張吉雄氏に会う事が語学上の進歩に影響があったと推定する。吉雄氏とは究理上の確信を深めたものである。(稿本二, 三)

背後に蘭語法の知識が在ったことは言う迄もない。彼が文政八年に語法を考えるに先立って文化六、七年頃蘭語法についての学習を進めつつあったであろう事は想像に難くない。興味ある事はこの「文政八年冬紀州若山本居宅講尺并他席」の東脩録をみるとその中に「武部尚二 伊勢人以蘭学仕紀州」¹³⁾とある。武部について杉本氏は次のように吉雄権之助の影響の全国化という形で紹介している。

名は尚二、あるいは游、号は子芸。紀州藩の医員で、長崎に遊学し吉雄塾に学んだ。彼の著述といわれるものに、文化15年(1818)刊の『発泡打膿考』がある。同書の医学史上の価値は、富士川游の『日本医学史』にゆずるが、昭和51年に謄写印刷で出版されたことを考えると、なかなかしつかりしたものであることがわかる。これは吉雄権之助が出島の外科医 H. レツケ(Herman Letzke) について学んだもの(筆記)を、武部が筆受したものであるという。『属文錦囊』の場合と同様である。武部はまた吉雄の兄、献作の門人であったという。おそらく語学にあつて、この権之助から蘭文法の手ほどきを受けたのであろう。〈狩野本〉は両者の結びつきを語ってあまりある。他の武部には『嶺南日本志図解』・『日本紀事訳解』という注目すべき訳業がある。前者の〈附言〉にはつぎのような記述があつて、武部の学統の一端がわかる。

曩者、東勢ノ須賀直入、国学ヲ好テ、本居大平に從游シ、母ヲ携テ、我紀府に家ス。其ノ弟武部游、幼ヨリ医ニ志シ、笈ヲ負テ、京撰ニ周歴シ、遂ニ崎港ニ游ヒ、蘭法ノ内外医術ヲ研窮センガ為ニ、訳家、西可圭、吉雄如淵等ニ就テ、阿蘭ノ書ヲ読ムヲ学フ。積功数年ニメ、能ク其ノ書ヲ読ミ、其文ニ通スルヲ得タリ。学業殆ト成ルニ垂ントスル時ニ当テ、俄ニ其ノ兄ノ訃ヲ伝フ。是ヲ以テ急遽東帰シテ、我紀ニ来リ、医ヲ業トシテ其母ヲ養フ。其ノ論其ノ術、大ニ奇巧ヲ示ス。於 是ニ生徒日ニ其塾ニ集リ、阿蘭ノ内外医術ヲ講ス。我公、其ノ能ク蘭書ヲ読ミ、能ク其ノ文ニ通スルヲ聞テ、秘府ニ襲蔵スル所ノ、檢夫爾ガ日本志ヲ出シ、臣廉ヲシテ、其書ノ大意、及ヒ其ノ画図ノ説ヲ質問セシム。(後略。表記は変更した)

文化十癸酉年八月

侍医臣今井廉印謹識

上のように紀州藩侍医今井廉が語る武部尚二(游)の履歴と蘭語力とは、きわめて優秀だったことが判明する。文中の西可圭は、長崎通詞、西吉右衛門、吉雄如淵は言うまでもなく吉雄権之助である。前者は文化8年に没している(『西家由緒書』)から、武部の長崎での蘭語習得の時期も推測できよう。柳圃の『蘭語九品集』も西可圭から武部に授受され、さらに本居大平などにも披見されている。¹⁴⁾

この文は吉雄の『重訂属文錦囊』の流布状況を述べたものであるが、文化十年には紀州藩で蘭学を教え、ケンペルの『日本志図解』を訳述しているのである。(なお杉本氏引用文中三カ所にわたる今井廉というのは今井恭である。)武部がかなりな語学力の持主であった事が分るが、彼が戊申の講席に出席するのは仲環や斎藤方策が戊申の講席に参加するのと同じくいわゆる蘭語法自体を学ぶものではなかった。逆に戊申がそうした交際で学ぶ事もあったのではないであろうか。戊申自身、

戊申遊説してはじめて人にあへる時かならず述る言あり。戊申は儒を業とし歌詠侍りまた諸家の君子にひろく交はらん為鎖鏡悉談蘭字語法等をかうじ候也。また西洋究理家の説かれた伝説に相かな

13) 同上 206頁。

14) 前掲杉本著「江戸時代 蘭語学の成立とその展開」昭和51。 875頁。

ひ候類をかうじ候事侍…¹⁵⁾

という考えであったようである。また『蘭学捷法』の終りに、

今サトストコロノ三法ハ、タダスマヤカニ蘭語ニ通ズルヲラムネトスル戊申カ心得ナリ。蘭学ニ志アラン人ハマツコレバカリノヲモ心得テマタヨキ師ヲ擇ヒテ其教受ルナラハ其学速成スベキモノゾ。

と記している。彼自身には、蘭語学者たらしとする意志よりも、講業（生活上の手段と教育技術）への工夫にあったと考えられる。

では教育上の工夫とはどんなものであったろうか。杉本博士は天保元年の『^{早引} 蘭字通』の分析中、この書が戊申の前作『蘭音仮名格』（文政九）（それは玄沢『蘭学階梯』の引き写しであり、部分的に藤林の『和蘭語法解』の影響もみられると指摘し）以上のものではないと述べた後、附加された部分について次の如く述べている。

つぎに附加の部分〈蘭字真草諳誦歌〉を紹介しておこう*。このうちおわりの第7番目にあげている1首は〈アエイオウ、ユエイクグク、スズストド、ドンフフフブ、ムールルウクス〉で、〈此ハオモテニ出セル蘭字本音ノ次序ナリ〉とあり、ここにあげている7首の歌は、〈初学コノ歌ヲ諳誦シテ蘭字ヲカキナラフベシ〉と説明している。ついでをもつて、さらにあげている和歌を3首選んでつぎに示してみよう（仮に番号を付す）。

1. 出ルハ^f字、出ヌハ^f字ゾ。右ハ^b字、左ハ^dノ字。oトモ^カ書ナリ。
2. ⁱハ右ニ^jハ左ニメグルナリ。rハクマデナリ。Yハサスマタ。
3. ^h ^k ^x ^z。e ^l ^v ^姿 誤ルナ。Bハ唐ウチハ^g字ハ^瓢箆*。

上の音節でも、〈KA〉を〈男字女字ヲ夫婦合体ニ……〉などと通俗的に述べているが、ここでも〈B〉が唐うちわとか、〈g〉がひょうたんなどの比喻、〈r〉を熊手、〈Y〉をさす又など、思いきった通俗性は、その歌唱性と相まって、当時の初学の人々には、オランダ文字に親しみを与えたと思う。彼の啓蒙家としての資質の一端を語るものというべきであろう。¹⁶⁾

この部分は『蘭学捷法 上』にそのまま記述されている。つまりこうした初学者への工夫が彼の拠り所であった。また、この書が「一名蘭字通補」と言われるように藤林の『和蘭語法解』の記述引用をもつて補ったという位置も判るのである。

さらに、後の『洋文翻訳便覧』への橋渡しの作品であった事が判るのである。

さて、「益ある友」として中天遊に啓発された語学上の問題以外に、いま一つ考えられるのは、同じく稿本に記した次の記事である。

「徴古新説も仲氏のうへなへる事はしるしうべなはざる事ははぶきすてたり。但し其後刪定して今は其時よりややくはしく也たり。」¹⁷⁾という。仲環は『曆象新書』をテキストにしていたのみならずケイルの「引律」の訳者であり、いわゆる西洋究理には通じていた。この方面においてもまた「益ある友」であったのである。「今は其時よりややくわしくなり

15) 前掲拙著 272頁。

16) 前掲杉本著〔II〕 1102頁。

17) 前掲拙著 259頁。

たり」というのは、文政十年の序文をもつ『徴古究理説』にはすでに「(吉雄) 阜山先生…遠西究理之説」つまり『遠西観象図説』(文政六年)が附加され、更に天保五年の『究理究問』には青地林宗『気海観瀾』(文政五年)が附加されているからである。これら究理学をめぐる問題は別稿に譲りたい。